

第30回
西洋社会科学古典資料講習会

2010年11月9日(火)～12日(金)

一橋大学社会科学古典資料センター

講 義 日 程

第1日 11月9日(火)

	9:10～ 9:30	オリエンテーション		
①②	9:40～10:30, 10:40～11:30	保存・修復（Ⅰ） 紙資料の保存	増田 勝彦 昭和女子大学大学院 生活機構研究科教授	1
③④	13:00～13:50, 14:00～14:50	書誌学（Ⅰ） 記述書誌を“読む”面白さ：図書館員のための書誌学入門	武者小路 信和 大東文化大学文学部 准教授	5
⑤⑥	15:10～16:00, 16:10～17:00	書誌学（Ⅰ） 記述書誌を“読む”面白さ：図書館員のための書誌学入門	武者小路 信和 大東文化大学文学部 准教授	
		懇親会(17:15～19:00)：希望者のみ		

第2日 11月10日(水)

		附属図書館見学(9:00～ 9:30)：希望者のみ		
①②	9:55～10:45, 10:55～11:45	書誌学（Ⅱ） 書籍の展示－実践篇	佐川 美智子 町田市立国際版画 美術館学芸係長	9
③④	13:15～14:05, 14:15～15:05	保存・修復（Ⅱ） 歴史的製本の修理と保存の基礎技術	岡本 幸治 製本家・書籍修復家	13
⑤⑥	15:10～16:00, 16:10～17:00	工房実演	貴重書保存修復工房	

※第2日のみ各時限の開始時間が異なりますのでご注意ください。

第3日 11月11日(木)

①②	9:40~10:30, 10:40~11:30	古典研究(Ⅰ) G.W.F. ヘーゲル その哲学と現代	大河内 泰樹 一橋大学大学院社会学研究科准教授	16
③④	13:00~13:50, 14:00~14:50	書誌学(Ⅲ) 『稀観書の書誌記述』による目録作成	床井 啓太郎 一橋大学社会科学 古典資料センター 専門助手	20
⑤⑥	15:10~16:00, 16:10~17:00	古典研究(Ⅱ) フランス啓蒙思想をめぐって	山崎 耕一 一橋大学社会科学 古典資料センター 教授	26

第4日 11月12日(金)

①②	9:40~10:30, 10:40~11:30	書誌学(Ⅳ) カメラリストたちの著作とその楽しみ	川又 祐 日本大学法学部教授	28
③④	13:00~13:50, 14:00~14:50	古典研究(Ⅲ) 印刷術出現前夜のイタリアの書物	大黒 俊二 大阪市立大学大学院 文学研究科教授	31
	15:00~15:30	修了式		

紙資料の保存

増田 勝彦

(昭和女子大学大学院生活機構研究科教授)

目次

1. 紙自身に内在する劣化要因
2. 環境に依存する劣化要因
3. 劣化予防対策の考え方と実施

1. 紙自身に内在する劣化要因

1-1. 碎木パルプ紙

リグニンの変色物質の転移

(本紙だけではなく周囲が茶褐色になる)

<対策>→包装用紙製品は中性紙とする(袋、包装紙、箱の紙、板紙)

1-2. 酸性サイジング処理紙

1-2-1. 酸性物質(明礬(カリ明礬)、硫酸アルミニウムなど)

①セルロースを加水分解し、結晶化を促す

②紙への添加物として

②-1 明礬

: 中国の表具師は糊に明礬を入れる(明時代の書籍の劣化)

*芥子園画伝(1701): 絹の場合 膠1.5%、明礬0.6%

: 日本画家は、膠に明礬を混ぜてドーサとし、絹、紙に塗布する

*狩野派の法: 紙の場合 膠2.1%、明礬1%

*本間良助「日本画を描く人のための秘伝集」昭和8年5月、厚生閣書店

: 西洋の15-16世紀の紙でも明礬は膠と共に使われていた

*マイエンヌの手記(1631):

紙に水3ガロン、膠1ポンド、明礬2.5ポンド(水に対して膠3.3%、明礬8.3%)

*森田恒之「画材の博物誌」昭和61年6月、中央公論美術出版

②-2 硫酸アルミニウム

: 木材パルプ紙の滲み止め用ロジンの繊維への定着剤として添加される

<対策>→酸性度の測定

湿式 中性紙チェックン、pHメータ

乾式 小谷尚子「非破壊方法による書籍資料の酸性度乾式測定方法の検討」

第28回文化財保存修復学会大会、2006

→アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置

炭酸カルシウム(CaCO₃)、重炭酸マグネシウム(MgHCO₃)

但し、明礬添加濃度が低い場合は、劣化速度は遅い。

→「和紙の劣化に対する明礬の影響」古文化財の科学 3 2, pp78-75

→「白色顔料による紙の劣化抑制」古文化財の科学 3 2, pp70-77

DAE法によるトリエタノールアミンの残留処置

1-2-2. 触媒(金属イオン)

①酸化反応を促進する(インクに含まれる鉄、付着した錆、顔料の緑青)

<対策>フィチン酸塩処理の効果が認められる

②黄土に含まれる鉄は損傷を与えない

<対策>→酸性を緩和する処置

1-3.保存・修復材料

①セロテープ類による汚損・変形

<対策>→有機溶剤による除去

②漂白剤（漂白中、残留漂白剤による）

<対策>→外観の向上を図るだけの漂白を避ける
→見難い文字を見易くさせるときのみ行なう
→修復家と討議
版画などでは光漂白(日光、蛍光灯)を処置することがある。

2.環境に依存する劣化要因

2-1.生物環境

虫害とカビ害（温度、湿度が高いと発生しやすい）が主だが、小動物による被害も可能性有り。

<対策>燻蒸、I P M *補足-1を参照

2-1-1.虫害

2-1-2.黴害

（黴の生育範囲）

①褐色斑点(フォクシング)→乾性の黴

②黒色・赤色・青色の黴→湿性の黴

<対策>→保存環境の制御、集中豪雨・配管事故による漏水
→普通の条件では、風通しを確保すれば過度の湿度は避けられる
→防水性の箱の中に一度水気が入ると乾燥し難くなる傾向がある

2-2.生物以外の環境

2-2-1.温度と湿度

①温度と湿度が高いと、化学反応速度が増す

②含水率が低いと紙は硬くなり、折曲げに弱くなる（過乾燥）

③温度湿度の変化による紙の伸縮—含水率が環境相対湿度により変化

④温度湿度の変化が急激な場合の本などの変形

<対策>→書庫・収蔵庫の温度湿度管理
設計による省エネ型収蔵庫、
温度湿度調節機器の設置、特に除湿器の設置
→木や紙、土壁や漆喰壁も湿度調整機能を持つ
→相対湿度と絶対湿度を理解する。調湿剤の含水量。

2-2-2.汚染空気

a)環境大気中の酸素・酸化硫黄・酸化窒素・水分等外部からの物質による化学的作用

汚染大気から→ 亜硫酸ガス (SO₂) 硫酸になる可能性
窒素酸化物 (NO_x) 硝酸になる可能性
オゾン、酸素など

<対策>→アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置 *補足-2を参照
炭酸カルシウム(CaCO₃), 重炭酸マグネシウム(MgHCO₃)
DAE法によるトリエタノールアミンの残留処置
→アルカリ性物質を含む紙で包む

<対策>→収納箱によるシェルター カイルラッパー他
→「容器に入れる—紙資料のための保存技術」、図書館協会
→中性紙によるガス吸着
「挿入法による中性紙の見直し」

[第15回資料保存協議会セミナー講演記録]平成14年10月
アルカリ性紙と長期間密着接触すると酸性紙の変色が大きくなる可能性。

b)環境材料から放出される物質による

b-1.新しい木材から放出される樹脂→桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

<対策>→内装木材の場合、ハترون紙、調湿紙などの被覆でも樹脂吸着に効果
樹脂の少ない材を使用する（桐、杉の白太など）

b-2.アルカリ性物質

①染料を変色させる→浮世絵

②写真の乳剤に影響

③絹を劣化させる

④アマニ油（油絵の溶き油）硬化膜を褐色化。

打ち立てコンクリートから放出されるアルカリ性物質など

<対策>→コンクリートの枯らしに時間掛ける、除湿機の連続運転、包装用紙で壁面を覆う
アルカリ性が極めて高い紙（残留木灰を多く含む和紙）に包む危険性

<対策>→中性の紙に包む

2-2-3.紫外線その他の光

a)光（一般的には、照明が明るいと温度も上がる。）

①可視光線、紫外線 日に曝された紙が変色する（白くなる、茶褐色になる）

<対策>→紫外線除去フィルターの使用

→光量の制限 暗ければ長時間、明るければ短時間

$50\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 200\text{日} = 100\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 100\text{日} = 80,000\text{Lux}/\text{年}$

（ギャリー・トムソン著、「博物館の環境管理」に記されている例）

博物館・美術館における展示照明の推奨照度（村上隆「文化財のための保存科学入門」）

資料	ICOM (1977) 推奨値	IESNA (1987) 推奨値	照明学会 (1999) 推奨値
光に非常に敏感な資料 (1)	50lxできれば低い方がよい (色温度約2,900K)	50lx	50lx (1日8時間、年300日で積算照度120,000lx/h)
光に比較的敏感な資料 (2)	150~180lx (色温度約4,000K)	75lx (1日8時間、年300日で積算照度180,000lx/h)	150lx (1日8時間、年300日で積算照度360,000lx/h)
光に敏感ではない資料 (3)	特に制限なし ただし300lxを超えた照明を行う必要はほとんどない (色温度約4,000~6,500K)	特に制限なし 実際には展示照明効果と輻射熱を考慮する必要がある	500lx

ICOM:国際博物館会議 IESNA:北米照明学会

(1) 染織品・衣装・死°ストリー・水彩画・日本画・素描・手写本・切手・印刷物・壁紙・染色した皮革製品・自然史関係標本

(2) 油彩画・テンペラ画・フレスコ画・皮革製品・骨角・象牙・木製品・漆器

(3) 金属・ガラス・陶磁器・宝石・エナメル・ステンドグラス

lx:ルクス、照度 K:ケルビン、色温度

2-2-4.用途に応じた加工・使用による汚染、変質、疲労破壊

①書の縦位置保管、取扱による表面の擦れ・ページの破れ

＜対策＞→現状では、収納箱、帙、ラッパーで保管
注意深く丁寧な取扱

②閲覧による紙の疲労

＜対策＞→調査・研究時だけの保護策

2-2-5.災害

①水害（水害を受ける可能性は予想以上に高い）

*火災時の消化水、

*台風・集中豪雨時に浸水だけでなく壁・天井からの水漏れ

*配管の故障による水漏れは意外な場所が被害を受ける

＜対策＞→水を被った文書は、まずポリ袋に入れて出来るだけ小分けにし、
急速に凍結乾燥させる（凍結乾燥装置）

一度に処理できる量をあらかじめ調べておく

→急速凍結のほうがよいが、なければ家庭用冷凍庫でもよい。

その時には、利用できる冷凍庫の存在を確認しておく。家庭用冷凍庫を使用する時は解凍後吸い取り紙で徐々に乾燥させる

2-3.収蔵用材

2-3-1.碎木パルプ紙に含まれるリグニンの変色と変色物質の転移

（本紙だけではなく周囲が茶褐色になる）

＜対策＞→包装用紙製品は中性紙とする（袋、包装紙、箱の紙、板紙）

2-3-2.新しい木材から放出される樹脂→桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂

が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

＜対策＞→内装木材の場合は、ハトロン紙などの被覆でも樹脂吸着に効果

樹脂の少ない材を使用する（桐、杉の白太など）

→中性紙によるガス吸着

「挿入法による中性紙の見直し」[第15回資料保存協議会セミナー講演記録]平成14年10月

2-3-3.アルカリ性が極めて高い紙（残留木灰を多く含む和紙）に包む危険性

＜対策＞→中性の紙に包む

3.劣化予防対策の考え方と実施

「繊維の寿命」「紙の寿命」と「紙を素材とした文化財(書籍など)の寿命」

修復の考え方

損傷を受けた原因は除去できるか。

本来の姿、装丁を尊重しているか。

乱暴な取扱にも耐える強さまで修復する必要はあるか。

図書館・文書館における環境管理（シリーズ本を残す8）稲葉政満著 2001.5

IFLA図書館資料の予防的保存対策の原則（シリーズ本を残す9）エドワード・P.アドコック編、国立国会図書館訳 日本図書館協会資料保存委員会編集企画 2003.7

記述書誌を“読む”面白さ —図書館員のための書誌学入門—

武者小路 信和

(大東文化大学文学部准教授)

世界各国の主要な国立図書館・学術図書館などを中心として、所蔵する古典資料のデジタル画像を web 上で公開するプロジェクトがさかんに進められています。とくに IT 企業の主導・支援によって、この動きは以前に想像されていたよりも急速に進行しています。所蔵する図書館へわざわざ出向かなくても、インターネットに接続できれば世界中のどこからでも、その古典資料にアクセスでき、本文を読むことができることは非常に大きな魅力です。

では、こうした動きが加速化していくなかで、各図書館が古典資料を所蔵することの意義、あるいは新たに古典資料を購入することの意義は、どこにあるのでしょうか？ インターネットで<本文>を読むことができるのであれば、各図書館が古典資料の「現物」を収集し、整理し、サービスし、保存していく必要はなく、逆にお金の無駄だということになってしまうのでしょうか？

詳しい説明は実際に講義において行いますが、とくに古典資料の場合、その造本行程に起因して、同時に印刷・出版された「同じ本」同士の間でも本文の異同が存在する可能性があります。したがって、同じ本の複本を、単純に重複しているから無駄であると判断することはできないし、たとえその本の画像が web 上で公開されているとしても、それで充分である・他のコピーが必要ないということではないのです。

たとえば、Shakespeare の最初の全集 (London 1623) [First Folio (最初の二折り本) と呼ばれる] に関しては、C. Hinman が、自身で開発した Collator (校合機) を用いて、Folger Shakespeare Library に所蔵されている First Folio (のなかから) 約 30 点を子細に比較・照合したことで、本文の異同の解明が大いに進みました。複本は、同じ場所で現物同士での比較・照合を可能にする点でも決して無駄なものではありません。なお、A.J. West. *The Shakespeare First Folio. Vol.2: A New Worldwide Census of First Folios.* (Oxford University Press, 2003)によれば、Folger Shakespeare Library は First Folio を 82 点 (現存するものの 1/3 以上) 所蔵しており、次いで明星大学の 11 点が続きます。

本の魅力は、中身を読む「読書」の面白さだけにあるのではなく、書物の「モノ」としての側面にもあります。とくに古典資料は、一冊一冊が「個性」をもち、なかなか渋い魅力をもっています。たとえば、David Pearson はその著書 *Books as History: The Importance of Books Beyond Their Texts.* By David Pearson.(London: British Library, 2008)において、書物にとって「本文」だけが重要なのではなく、「モノ」としての書物はそれぞれが歴史的に持つ個性 (たとえばブックデザイン、来歴・書き込み、製本など) を持っており、その歴史的な個性の重要性・魅力を、豊富な図版を使って具体的に紹介しています。(読み通すのが大変であれば、図版の解説部分だけを読んでも、面白い本です。) この本でも紹介されていますが、「本当にコペルニクスの著作は読まれなかったのか」を調べるた

めに、科学史の研究者が約30年かけて世界中に残っているコペルニクス『天球の回転について』(1543)の初版と第2版約600冊の現物調査（とくに書き込みの調査）を行いました[Gingerich, Owen. *An Annotated Census of Copernicus' De Revolutionibus (Nuremberg, 1543 en Basel, 1566)*. (Leiden: Brill, 2002)]. この調査を行ったオーウェン・ギンガリッチの『誰も読まなかったコペルニクス：科学革命をもたらした本をめぐる書誌学的冒険』（早川書房 2005）では、できるだけ多くの現存する資料に直接あたることによって、初めて見えてきたことが生き生きと語られています。このような現存する資料に直接あたる研究方法は、数は少なくても、増えてきています。こうした学術研究を支えるためにも、図書館が現物の古典資料をこれからも所蔵していくことが重要です。

古典資料がもつ個性、本文（テキスト）、製本、来歴(provenance)など、印刷・出版・造本に関わる「個性」を見抜くためには、書誌学の基本的な知識が必要です。

書誌学(bibliography)という用語は、書誌の編纂およびその活動を意味する列挙（分類）書誌学(enumerative bibliography)・体系書誌学(systematic bibliography)を指す場合と、「モノ」としての書物の研究あるいは文献伝達の研究(the science of the transmission of literary documents)を意味する分析書誌学(analytical bibliography)を指す場合があります。ここでは後者、つまり「原稿や植字工の植字癖の研究・分析を含む造本工程の研究を通して正しい本文を解明しようとする試み」（山下浩）としての書誌学を対象にしています。

書誌学の魅力の一つは、紙、活字、印刷面、造本など、「モノ」としての書物に残された具体的な物理的証拠に基づいて、その書物の本文、印刷・造本工程や出版にまつわる疑問を解明する「謎解き」の面白さにあります。といっても、書誌学の調査を行うためには、ある著作の同じ本あるいは版・刷・発行の違う本をできるだけ多く比較照合する必要があります。さらに著者や出版者の手紙・記録などの史料・資料を見つけ読み込んでいくことも必要です。購入を検討する場合や目録をとる場合など、図書館業務のなかで古典資料を扱う図書館員にとって、こうした「謎を解く」ためにそうそう時間や手間をかけてもいられません。そのため、書誌学の研究成果（書誌類・論文など）を上手に利用する必要があります。いわば、書誌学者を実際に謎を解く探偵とみなせば、図書館員は、実際の本と照合しながら書誌類・論文を読むことによって、推理小説を読むように謎解きのエッセンスを楽しめばよい、といえるかもしれません。（図書館員が実際の謎解きに取り組むことを否定しているわけではなく、積極的に謎解きに参加して貰いたいと思っています。）

今回は、（書誌学の研究成果を活用するために必要な）書誌学の入門的な知識と共に、書誌学の魅力・面白さを紹介したいと思います。

- 1 古典資料をオリジナルで所蔵することの重要性
- 2 書誌学の研究成果を上手に利用する
- 3 図書館員のための書誌学の基礎（Ⅰ）：本の仕立て
- 4 図書館員のための書誌学の基礎（Ⅱ）：記述書誌の読み方

- 5 図書館員のための書誌学の基礎 (Ⅲ) : 印刷地の見分け方
- 6 書誌学調査のための科学機器
- 7 西洋古典資料とインターネット

といっても、講義時間の関係もあり、今回は主に「3 本の仕立て」と「4 記述書誌の読み方」を中心に上げる予定です。

「本の仕立て」(その本がどのような折り丁によって構成されているか)は、「モノ」としての書物を理解するうえでの出発点であり、「記述書誌の読み方」は、(理想本について記録した)記述書誌*と比較・照合することによって、その本が

- ①どんな本であるのか(著者、出版者、出版年など)
- ②どの版(edition)、刷(impression)、発行(issue)に属するのか(他のコピーとの関係)
- ③完全なコピーであるのか(本来あるはずの紙葉、図版などを欠いていないか)

といったことが判るので、図書館で古典資料を購入したり、利用者にサービスをする際に役に立つでしょう。

*図書館の目録が、実際に眼の前にある一冊の本の書誌的事項などを記録したものであるのに対し、記述書誌(descriptive bibliography)は、理想本(ideal copy:市販された刷・発行の範囲内で、出版者が出版を意図した形の本を歴史的に検討して再構築した本)の書誌的事項などについて記録しています。

業務のなかで古典資料を同定するために記述書誌を利用する場合には、その資料に関わる記入・書誌記述を参照するだけで済むことも多いでしょう。でも機会があったら、記述書誌の序文などの解説部分にも目を通すことをお勧めします。記述書誌を“読む”ことで、その著作の成り立ちや印刷・出版の経緯、著者と出版者との(交流や諍い・いざこざを含む)関係などを知ることができただけでなく、そのような経緯や関係が「モノ」としての書物に具体化されていること、その結果「モノ」としての書物を記録した記述書誌の記入・書誌記述にも反映されていることが理解できるでしょう。

詳しい資料・参考文献リストは当日配布しますが、とりあえずの参考文献として以下のものを挙げておきます。

- ・高野彰『洋書の話』増補版(丸善 1995)

記述書誌の読み方の基本を知るうえで便利な日本語の文献。

- ・G. Thomas Tanselle. *Bibliographical Analysis: A Historical Introduction*. (Cambridge University Press, 2009) 書誌学の動向・主要な研究を歴史的に解説したもので、文献案内としての機能も併せ持っており、書誌学の研究史および重要な研究成果を知るうえで非常に便利な本。

なお、同氏による基本文献の書誌 *Introduction to Bibliography* および *Introduction to Scholarly Editing* が、University of Virginia Rare Book School(RBS)のサイト <http://www.rarebookschool.org/tanselle/> から無料で入手できます。(ダウンロードして損はありません。)

- ・書物関係の用語事典として有名な Carter, John. *ABC for Book Collectors*. 8th ed. by N. Barker. が、International League of Antiquarian Booksellers(ILAB)のサイト http://www.ilab.org/eng/documentation/29-abc_for_book_collectors.html から無料で入手できます。(ダウンロードして損は

ありません。)

本書(第六版)の邦訳: 『西洋書誌学入門』(図書出版社 1994)(ビブリオフィル叢書)

- ・安形麻理『デジタル書物学事始め』(勉誠出版 2010)

最近注目をあびるようになった書誌学へのデジタル技術の応用の動向・具体例を知るうえで有用な本です。檜村雅章『貴重書デジタルアーカイブの実践技法: HUMI プロジェクトの実例に学ぶ』(慶應義塾大学出版会 2010)も参考になります。

- ・ウィリアム・ノエル、リヴィエル・ネッツ『解説 アルキメデス写本: 羊皮紙から甦った天才数学者』(光文社 2008)も、対象は印刷本ではなく写本ですが、面白く読め、お薦めです。
- ・書誌学・古典資料関連の web サイトの入り口としては、私のサイト「The Biblio Kids !」
<http://www1.parkcity.ne.jp/bibkid>に「泰西古典資料 リンク」のページがあります。

書籍の展示—実践篇

佐川 美智子

(町田市立国際版画美術館学芸員)

この時間は、書籍を展示する際に必要な知識、知っておくと便利な工夫などについて経験上得た知識をもとにお話します。特に古典籍やオリジナルの版画が入っているような美術的価値の高い貴重書は展示の機会が多いものと思われます。ここではそういった貴重書、稀覯書を安全に美しく展示することを中心にお話していきます。

はじめに

展示と保存とは基本的に逆のベクトルの事柄です。資料を完璧に保存しようとするなら、展示も閲覧もしないほうがよいのです。しかし、言うまでもなく、文化財は収集・保存して未来に伝えると同時に、展示公開することで、文化の発展に寄与すべきものであることもまた事実です。美術館・博物館はもともと「収集・保存」と「調査・研究」そして「展示・公開」を柱にしてきた施設ですが、図書館においても資料公開の促進が求められ、電子化された形での公開も盛んになってきました。それにより、歴史上・文化上の貴重な書籍、美しく鑑賞に値する書籍の所在があきらかとなり、個別的な閲覧のみならず、実物の展示という形での公開も求められる時代となったといえるでしょう。

基本的な注意

本を展示する際には表紙そのものを見せるのでない限り、開いた状態にする必要があります。したがってある一定の期間、開かれたままの状態におかれることになります。ですから冒頭に触れたように、保存上の配慮が常に不可欠です。19世紀以前の古い書籍は装幀が一冊ごとに異なり、保存状態もさまざまです。保存修復の専門家の方に実際に見ていただき、一冊ごとに適切な処置を講じて展示するのが理想的でしょう。極度に保存状態の悪いものは展示によってさらに状態の悪化を招きかねませんので展示には適しません。したがって保存状態の良い資料を選択し、また同時に書物を見開きで展示した場合に必要な展示用具を準備します。美術館で他の諸機関の蔵書を拝借する企画を立てる際には、まずは調査をさせていただき、状態をよく検討したうえでお願いをするようにしています。背表紙等に傷みがあったり、製本状態が非常に硬く、開きが悪いといった資料はもともと頁を開いての展示には向きません。

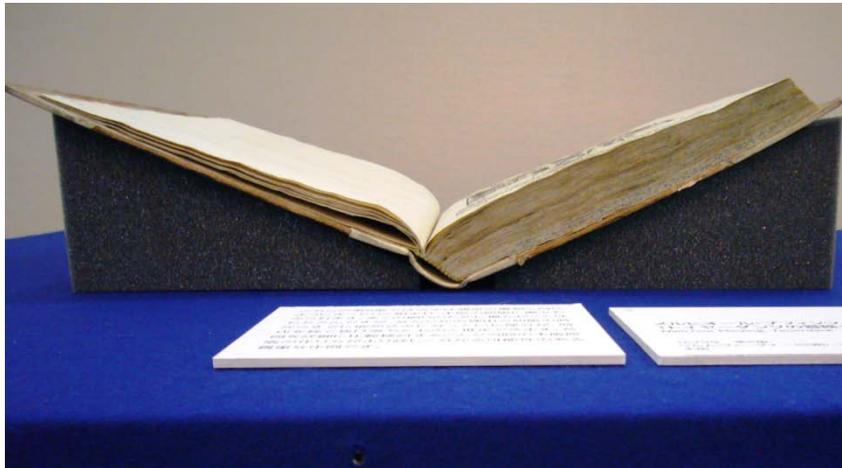
展示のための工夫

展示にあたっては書籍を一定期間、開いたままの状態にするため、そのことによるダメージをできる限り避ける必要があります。そのため、見開きにした場合に左右の頁を支えるため、<枕>状の用具、いわば小型の<支持台>を使います。閲覧や調査の場合にも<書見台>を用いることが推奨されていますが、展示用としては、個々の書籍によって、また開く位置によって、支えるべき左

右のパーツのヴォリュームや高さが異なるため、調節しやすいよう、さまざまな高さの＜支持具＞を用意します。これにより、頁の開き具合に応じ、開いた両方の頁を支えます。＜支持具＞については様々なものがありますが、比較的扱いやすく、費用面でも手ごろな方法をご紹介します。

＜支持台＞としてはウレタンや発泡スチロールといった加工しやすい素材を必要な大きさに裁断し、そのままか、あるいは展示デザインに配慮して紙や布で包んで使用します。開く角度は、無理せず楽に自然に開くレベルまでを目安にしています。なお、開いた状態で頁が浮き上ったり戻ったりする場合、市販されているガラス製の掛算（けさん）や布製のペーパーウエイトを使って押さえるのが簡単ですが、透明の薄いポリエチレンを2cm程度の幅で細長く切ってテープ状にしたもので頁を巻いて押さえることもします。テグス糸を張って押さえることもありますが、その場合は糸が紙の縁に食い込まぬよう、注意深い手当てが必要となります。

また開き癖がつくのを避け、同一の頁だけが長時間、光に晒されるのを避けるため、会期中で頁替えを行うこともあります。



①ウレタン製で左右が分離しているタイプ

この画像では三角柱型。その他に長方形など様々な大きさと厚みのものを用意しておくことで調節できる。



②発泡スチロールを紙で包んだもので左右がつながっているタイプ

このタイプはあらかじめ 1 冊ごとに計測し、開いた時の角度を確認した上で制作する必要がある。とはいえ、多種多様な大きさのものが多数あれば、どれかで対応できるという場合が多い。

図①②では水平の状態で開催しています。しかし手前よりも奥を高くしたほうが鑑賞しやすいことも事実です。傾斜をつけて展示したい場合はそのような台を用意するか、図②ならば奥側になにかを挟んで高くすることもできます。いずれにせよ、傾斜は書籍に負担をかけるので、水平面からせいぜい 5cm あげる程度に留めるのがよいと思われます。(註)

また厚みがあまりなく、非常に開きやすい絵本のようなタイプではアクリル製のブックスタンドなども利用でき、この場合はかなり傾斜をつけても問題はあまりないと思われます。



図③ このアクリル製ブックスタンドは特注品ですが市販品もあります。

展示場所について

昨今では図書館でも展示活動が盛んになりつつあります。それに伴って設備の整った展示専用のスペースが併設されている図書館も増えていると思われます。展示専用スペースであれば、収蔵庫とあまり変わらない適切な温湿度と照度を実現でき、また可動式にせよ作り付けにせよ、堅牢な展示ケースも備わっているはずですので、展示は比較的容易です。ただ、外気や外光が入るロビー的な場所ですと、書籍に適した環境の保全是難しくなりますので注意が必要です。

魅力的な美しい展示

いうまでもなく、展示にあたっては目的やテーマを明確にすることが必要で、これは大抵の場合クリアされています。しかし案外見過ごされやすいのが、「説明のための展示」なのか「鑑賞のための展示」なのかを明確にすることです。何らかのテーマを説明・解説したいのか、あるいは展示品の魅力を最大限に発揮させる「鑑賞のための展示」なのか。もちろんこの二つのポイントをうまく両立させることも不可能ではありませんし、鑑賞を主眼としつつなんらかのテーマを理解させるこ

とが最終目的ではあります。しかし「説明のための展示」の場合、実物がない時は複製（レプリカ）等で補うこともあります。そうするとオリジナルと複製品が入り混じってしまい、一般的な鑑賞者には見分けが付き難いという事態にもなります。これでは保存上のリスクをおかしてわざわざオリジナルを展示する意味が薄れてしまいます。とりわけ版画の挿絵などが入った美術的価値の高い作品では、オリジナルと複製品とでは色や材質感がまったく異なることはいうまでもなく、実物大でない限り大きさも異なりますので、「鑑賞のための展示」で複製品を展示することはあまりしません。仮に展示する必要があった場合、複製品であることが明確にわかるようにします。

「説明のための展示」ならば、見る人の理解を促進することが主目的ですから、文字を印刷した解説パネルや写真パネル、そして複製品などで構成してよく、展示そのもののデザイン的な美しさが中心課題ではないでしょう。「鑑賞のための展示」では展示物1点1点の持つ魅力、美しさをじっくりと味わっていただくことが大切です。スペースに余裕をもって、可能ならばライティングなどにもこだわります。解説パネルは必要最小限にすべきです。文字の多い解説パネルがあると、それを読むことに大きなエネルギーが向けられ、肝心の作品と向き合う時間も体力も損なわれるということになりかねません。美的価値の高い書物はそれ自体がパワーをもっています。展示の工夫とは、保存問題をクリアしつつ、その魅力を十二分に発揮させることができる環境を整えることではないでしょうか。

*註) 一橋大学社会科学古典資料センターの Study Series No.64 「西洋古典資料の組織的保存のために[改訂版]」(June 2010) で、岡本幸治氏が書見台について詳しく書いておられますのでそちらを参照して下さい (<http://hdl.handle.net/10086/18610>)。

歴史的製本の修理と保存の基礎技術

岡本 幸治

(製本家・書籍修復家)

西洋古典資料は、テキストの重要性は勿論のことだが、歴史的形態が大切な場合がある。折丁構成におけるページ差し替えの有無やブランクページの存在、刷りや版の違いが書誌的に重要な意味を持つ場合がある。出版形態や製本がテキストの社会的評価と結びついて意味を持つことがある。著者や所蔵者による献辞やメモ、線引き、蔵書票なども重要である。

このような形態的特徴は時代的背景や資料の来歴を表していて興味深いものがあるが、利用と保存にとっては問題が多い。製本は画一的でなく一点ごとに構造や機能、装丁材料が異なっていることが多い。表紙がはずれる、表紙の革が傷んでいる、見返しが切れている、綴じが傷んでいる、本の開きが悪い、ページが破れている、ページがとれている、ページが変色している、虫やカビの害がある、などの問題が発生する。そのままでは利用できない、または利用することで更に破損が進む恐れのある場合がある。問題が顕在化していない場合を含めて、所蔵する西洋古典資料全体の現在と将来に渡る利用を組織的に保証するために、計画化された効率の良い修理や保存の手段が必要とされる。修理と保存の手段には資料への働きかけ方の様々なレベルがある。資料への働きかけが強まれば、資料の原状に変更が生じる可能性が高まる。実際にどのような作業を行うのかは、破損状況だけではなく資料価値、利用頻度、代替利用の可能性、予算規模などを勘案して保存政策の中で決定される。

資料に直接に働きかけない手段としては、保存環境の調節と管理、蔵書調査、メディア変換、保存容器の作製、災害対策プログラムの作成、などがある。直接資料に働きかける手段としては、本のクリーニング、ページや見返し、表紙などを修理する小規模修理、もう少し専門的な製本構造の修理、再製本、革劣化対策作業、虫害対策作業、脱酸作業などがある。

保存環境の調節と管理

温・湿度の管理(温度、湿度とも調整、フィルター、結露など)、蛍光灯の紫外線対策、ホコリ(持ち込まない、溜めない、清掃する)、

カビ／虫害(IPM 管理)

蔵書調査

調査票の作成(蔵書構成と調査目標による)

蔵書の形態(製本構造と材料や書誌的情報などを記録)

劣化状態(劣化の現状、数量化、記録化)

記録を分析して潜在的な保存ニーズを把握する

利用頻度、資料価値などを併せて検討することで作業の優先順位を設定

メディア変換

資料の利用媒体の変換－酸性化資料など脆弱な素材の資料の利用を促進

アクセスの制限、原資料の保存

メディア変換作業に必要な修理、保管環境の向上

保存容器の作製

大量の作業が可能

様々な種類の保存容器(保存環境の向上／物理的保護、配架、展示、閲覧などに利用)

作業の記録化が重要

災害対策

災害・火災・事故など緊急時の対策をたてる。連絡先、優先順位の設定。

本のクリーニング

刷毛、ワイピング・クロス、吸塵機、掃除機などを使用

カビの除去－HEPA フィルター装着の掃除機

小規模補修

館内で作業可能なものがある

ページ修理(和紙とでんぷん糊、粘着テープは使わない)

見返しの修理(糊をさす、和紙で修理、寒冷紗などで修理)

背表紙の修理(クータの利用、和紙で修理、クロスや革で修理)

製本構造の修理

専門家に委託、仕様を話し合う(健全な構造、良質の材料)

寒冷紗、クータなどによる背の修理

とじの修理

表紙ジョイントの修理など

再製本

館内で一部可能

仕様を話し合う(健全な構造、良質の材料)

薄い本や仮綴じ本など

革劣化対策

館内作業が可能、判断は慎重に

HPC(ヒドロキシ・プロピル・セルロース)の1,5%アルコール溶液

良質の保革油とコーティング剤(SC6000)

虫害対策

定期的点検

冷凍処理など

発生時の連絡先(文化財虫害研究所、エフシージー総合研究所、東京文化財研究所)、

脱酸作業

ブックキーパー法(プリザベーション・テクノロジーズ・ジャパン)

(DAE)乾式アンモニア・酸化エチレン法(日本ファイリング)

書籍の修理と保存に必要な専門的知識は傷んだ資料の回復に適用されるばかりではない。資料に引き起こされる傷みは形態や構造に起因するものであり、利用によってどのような負荷が発生するのかを指摘することができる。材料の劣化も構造・機能による負荷を経て顕現化するものである。資料を利用することで、どのような負荷が発生し、構造と材料にどのような影響を与える可能性があるのか、現在発生している損傷や欠落・変異などが、そのままにしておけば進行して憂慮すべき段階へと進行するのかなど、現在の利用頻度、利用方法で今後も安全に使い続けることが出来るのかなど、今後の保存方法を検討する上で修復に関する専門的知識と経験を役立てることができる。また可能な限り資料に変更を加えずに効果的な修理を行う手段を提案することができる。書籍の修理と保存の技術は予防的保存の技術としても有効である。

参考文献

- 『防ぐ技術・治す技術－紙資料保存マニュアル』
(日本図書館協会 2005年)
『西洋製本図鑑』
(ジュゼップ・カンブラス著 市川恵里訳 岡本幸治日本語版監修 雄松堂出版 2008年)
『資料保存の調査と計画』
(安江明夫監修 日本図書館協会資料保存委員会編集企画 日本図書館協会 2009年)
『博物館・美術館の生物学－カビ・害虫対策のための IPM の実践』
(川上裕司・杉山真紀子著 雄山閣 2009年)

G. W. F. ヘーゲル その哲学と現在

大河内泰樹

(一橋大学大学院社会学研究科准教授)

cs00972@srv.cc.hit-u.ac.jp

はじめに

G. W. F. ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) は、おそらく一般でもその名前をよく知られている哲学者の一人だろう。1770年にドイツのシュトゥットガルトに生まれ、1831年にベルリンで当時蔓延していたコレラに斃れるまで、61年という、現代から見れば短い生涯を送ったヘーゲルではあるが、彼の哲学は現在に至るまで、大きな影響を及ぼし続けている。

彼の哲学は一般に「ドイツ観念論」に属するとされる。ドイツ観念論とは、カント (Immanuel Kant 1724-1804) の『純粋理性批判』(1781) をきっかけとして生まれた哲学思潮で、ヘーゲル以外の代表者としては、フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814)、シェリング (Friedrich Wilhelm Joseph Schelling 1775-1854) があげられる。彼らは、カントが切り開いた「超越論哲学」を継承しながら、さらにこれを批判的に継承・発展させていったのである。ヘーゲルはその中でも特にドイツ観念論の完成者とみなされている。

ヘーゲルのテキスト

ヘーゲルには全集と呼ばれるものがこれまでに5つ存在する。おそらく専門外の方は、なぜこれほど何種類もの全集が出版されるのか怪訝に思われるだろう。(ただでさえ大学の図書館は、蔵書が増え場所が足りないのに、1人の哲学者で、そんなに場所を取られたら困ると思われるかもしれない)。そのもっとも大きな理由は、時代が下るにしたがって、テキスト編集上の文献学的な要求が高まってきたということがある。現在では以前よりもより厳しい一貫した基準に従って、テキストを編集することが求められている。とくに、ドイツのノルトライン・ヴェストファーレン州アカデミーの委託によって現在刊行されつつあるいわゆるアカデミー版¹は、そうした現在の文献学的な要求にそった方針に従って編集されており、今後当分決定版の位置を占めることになると思われる。また、この版の一つの特徴は、ヘーゲルの草稿類の厳密な考証を経て、正しい執筆年代にしたがって編集されている点にある。

¹ Georg Wilhelm Friedrich Hegel: *Gesammelte Werke*, in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft hrsg. V. der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Hamburg: Meiner, 1968ff.

それまで、ヘーゲルが特に若い頃に書いた草稿類についてその執筆年代が間違っ理解されており、それにしたがって間違っ研究が生み出されてきたことがあった。この全集が刊行されることで、そのようなことは今後なくなるであろう。

こうしたことが可能であるのは、ベルリンの国立図書館を中心にヘーゲルの手書きの草稿が、保存されていたからである。私たちの研究は、信頼性の高いテキストに基づくことによって初めて可能である。そして、その編集に当たっては、草稿が適切な状態で保存されていることが重要であり、われわれの仕事はこうした資料の基礎の上に初めて成り立っているといえる。

ヘーゲルの著作と体系

上に見たように、ヘーゲルの全集はいずれも 20 巻程度であり、アカデミー版も現在刊行が完成しつつある第一部（ヘーゲル自身の著作を収録）については 21 巻となっている。しかし実はヘーゲルが生前に刊行した著作はそれほど多くない。本の形で出版したものは『精神現象学』（1807）、『(大) 論理学』（1811-1816, 1832）、『エンツュクロペディー』（1817, 1827, 1830）、『法哲学』（1820）の 4 冊（ただし同じ著作を第二版、第三版と書き換えてはいる）にすぎない。そのほかは、雑誌論文をまとめたものもあるが、これまでにヘーゲルの著作として広く知られてきたもの『歴史哲学』『哲学史』などは、実は弟子の講義ノートをまとめたものである。

ヘーゲルは、ドイツ観念論のみならず近代哲学の完成者とたびたび見なされるが、それは彼が「体系」という形で哲学（ないしは「学問」）を叙述しようとしたことに由来する。彼の体系は三部からなるとされ、第 1 部は「論理学」、第二部は「自然哲学」、第 3 部は「精神哲学」である。しかし、ヘーゲルがこのうちまがりなりにも完成させたのは「論理学」だけであり、体系の全体については、かろうじて講義用のテキストである『エンツュクロペディー』で、その概要が示されているに過ぎない。『法哲学』も、「精神哲学」の一部に対応するが、圧縮された講義用のテキストに過ぎない。

「エンツュクロペディ(Enzyklopädie)」とは、英語でいう「エンサイクロペディア encyclopedia」をドイツ語にしたものである。これは 18 世紀のフランス啓蒙主義において人類の知識を網羅的に整理しようとした「百科全書」に由来するわけだが、ヘーゲルはこれにさらに独自の意味を与えている。「エンツュクロペディー-Enzyklopädie」の「ツュクロzyklo-」ないし「サイクロ cyclo」は円を意味し、「ペディー-pädie」はギリシア語で教育を意味する paideia に由来することばである。ヘーゲルにとっては学問が「円環」をなしているということが重要視される。体系は「円環の円環」なのである。つまり「論理学」「自然哲学」「精神哲学」のそれぞれは円環をなしており、これらが結びついて哲学は一つの円環をなしているとされる。体系とは、円環の重層的な構造であり、その中で学問は徐々に進展し

ていきながらも、最後に最初の場所に戻ってくるのである。

『精神現象学』

さて、ここまでヘーゲル最初の本である『精神現象学』について触れてこなかった。というのもこれは、ヘーゲルの体系の中で特殊な位置を占めているからである。この『精神現象学』は「精神哲学」とはさしあたり別のものであり、つまり円環をなして閉じているはずの上の体系の中には含まれていない。というのもこの『精神現象学』は体系の導入をなすもの、つまりわれわれを体系の入り口に導くものと考えられているからである。それは体系という建物にはいるはしごに比することができるだろう。

この『精神現象学』を執筆していたときヘーゲルはイエナという町の大学で、「私講師」という大学教員の駆け出しのような身分にあった。この本は1807年に出版されたが、その前年の1806年には、ナポレオン率いるフランス軍とプロイセン軍が戦い、プロイセンが敗れる「イエナの戦い」がイエナ近郊で起こっている。ヘーゲルは当時まさにそのイエナにおり、そうした緊迫した状況の中、最初の著作を執筆していた。ヘーゲルが、イエナを巡察に来たナポレオンを目にし、彼を「馬上の世界魂」と呼んだことはよく知られている。

『精神現象学』の目標はわれわれを体系へと、つまりは真理へと導くことである。この目標をヘーゲルは「絶対知」と呼ぶ。それに対し、ヘーゲルが出発点におくのは「自然な意識」である。つまりこの精神現象学は「自然な意識」、つまり私たちの日常的な知識が、「絶対知」に至るまでの成長を描いたものであり、ゲーテの『ヴィルヘルムマイスター』といった「教養小説」とたびたび比較される。「教養」というと、私たちは単なる文化的な知識のことと考えがちであるが、これは人間の形成ということの意味する。つまり、『精神現象学』は「自然な意識」が様々な経験をしながら、いかにして自分を「絶対知」へと形成していくのかを描いている。ところがこの『精神現象学』は、単なる個人的な「意識」が問題になっているわけではなく、歴史、宗教や文学作品もそこに含まれている。

ヘーゲル哲学と現在

このようなヘーゲル哲学は、ヘーゲル以降の哲学に大きな影響を残した。積極的に受容するにせよ、批判するにせよヘーゲルに言及することなしに、哲学を語ることは、今日不可能だろう。確かに、ヘーゲルの哲学は20世紀には、一方では英米の分析哲学において、他方ではフランスのポスト構造主義において批判されてきた。そうした流れは未だに続いてはいるが、他方でヘーゲル哲学に新たな可能性を見いだす傾向も見られる。その中でも特に重要視されているのは、「承認論」という議論である。

「承認論」は、近代的な個人主義に対する一つの訂正として理解されている。たとえばホブズは、自己保存を行う個人を前提とし、そこから「契約」という概念を通じて「社会」

ないしは「国家」の成り立ちを説明しようとした。その際によく知られているようにホッブズは「万人の万人に対する闘争」という自然状態を想定し、その不都合から人間は社会の形成に駆り立てられるとしたのであった。それに対し、「承認論」は個人のアイデンティティの形成を他者との関係の中で説明しようとするものである。その人があるアイデンティティを獲得するのは、その人が他の人によってそうした存在として承認されるときである。ヘーゲルはそうしてホッブズの「万人の万人に対する戦い」というモデルに代わって、「承認をめぐる闘争」という社会哲学のモデルを提示した。これは、現代社会における精神的病理の問題や、マイノリティのアイデンティティの問題へ応用可能な議論であり、実際そうした領域でこの承認論は、受容され、発展させられている。

『稀観書の書誌記述』による目録作成

床井 啓太郎

(一橋大学社会科学古典資料センター)

1. はじめに

一橋大学社会科学古典資料センターでは、1850年以前に出版された古版本およびメンガー文庫、ギールケ文庫、フランクリン文庫などの特殊文庫からなる7万5000冊余の貴重書群を所蔵しています。これらの資料は冊子体目録やカード目録で管理されているほか、国立情報学研究所の総合目録データベースへの登録を通じて、電子媒体の目録整備が順次進められています。今回の講義ではこれら古版本の目録を作成する際のポイントを、特に英米目録規則第2版(AACR2)と『稀観書の書誌記述』の記述の違いに注意しながら確認していきたいと思います。

2. 目録規則

古典資料センターでは、古版本の目録作成時に主に以下の目録規則類を使用しています。

- ・『英米目録規則(第2版日本語版)』(AACR2) 東京, 日本図書館協会, 1982.
- ・『稀観書の書誌記述』国立, 一橋大学社会科学古典資料センター, 1986. (一橋大学社会科学古典資料センター Study Series, no. 11)
- ・Anglo-American cataloging rules. 2.ed., 1998 revision. Chicago, American Library Association, 1998.
- ・Bibliographic description of rare books. Washington, D.C., Library of Congress, 1981.
- ・Descriptive cataloging of rare books. 2.ed. Washington, D.C., Library of Congress, 1991.
- ・Descriptive cataloging of rare materials (books). Washington, D.C., Library of Congress, 2007.
- ・『目録システムコーディングマニュアル』東京, 国立情報学研究所.
- ・『目録情報の基準 第4版』東京, 学術情報センター, 1999.

総合目録データベースに洋書の目録を登録する際には、『英米目録規則(第2版日本語版)』(AACR2)と『目録システムコーディングマニュアル』を使用しますが、センターでは西洋古版本に特有の事項を書誌記述に反映させるため、カード目録の時代からAACR2だけでなく『稀観書の書誌記述』を目録規則として用いてきました。

『稀観書の書誌記述』は、18世紀以前に印刷された出版物や、手刷り印刷本などの目録作成に使用することを想定して、AACR2における初期刊本に関する規程(2.12-2.18)を拡張して作成された *Bibliographic description of rare books*. Washington, D.C., Library of Congress, 1981 の邦訳版です。この規則は現在までに2回改訂を重ねており、第2版が *Descriptive cataloging of rare books*. 2nd ed. Washington, D.C., Library of Congress, 1991、最新版が *Descriptive cataloging of rare materials (books)*. Washington, D.C., Library of Congress, 2007 です(それぞれタイトルが異なるので注意)。基本的にAACR2に準じた内容ですが、細部で異なる部分やAACR2との間で相反する規定もありますので、これらに基づいて書誌を作成する場合には注意が必要です。以下『稀観書の書誌記述』に基づいて書誌を作成する際のポイントを具体的に見ていきます。

3. 目録作成

古典資料センター所蔵のLazari Bayfii Annotationes in legem II De captiuis & postliminio reuersis... .Basileæ, Apud Hier. Frobenium, 1537. 【Franklin:2597】(図表1,2)を題材に、書誌作成時の注意点を考えます。(反転は『稀観書の書誌記述』の規程)

<TR>

- ・レイアウトから一見してタイトル、著者名を見て取ることができることが多い現代の出版物と異なり、古版本では、しばしば多くの情報が切れ目なく連続してタイトルページに並べられた。また、課題資料のように「著者～の…」などの形で、タイトルに著者名が組み込まれる形式もしばしば見られた。

*1.1 “Lazari Bayfii” = 「ラザル・バイフの」: 書名に掛って著者名を表している。
→ 属格で掛っている場合タイトルと分離できない。

- ・ロング s と f を間違わないように気を付ける。横棒が右に突き抜けているのが f。

*1.4 “Poftliminio” × “Postliminio” ○

- ・“I/J”、“U/V/W”の転記に注意する。(OH.)

*1.7 “EIVSDEM” → “eiusdem”

- ・本タイトルは一般に短縮しない。例外として、本タイトルが極めて長く、かつ情報の本質を損なうことなく短縮できる場合は、重要でない語または句を省略できる。

(1B8.)

(AACR2 1.1B4. 長い本タイトルは、不可欠な情報を損なわない場合に限って、縮約する。)

- ・責任表示は一般にすべてを記録する。個人または団体の名が非常に多数であるときは、4人以上は省略し、3人目までを記録する。(1G5.)

(AACR2 1.1F5. 単一の責任表示中に4人以上の個人または団体の名称が含まれる場合は) ...最初の一人もしくは一つだけを記載し、他はすべて省略する。)

<ED>

- ・版表示、またはその一部分をタイトルページ以外からとったときは、その情報源を注記エリアに示す。(2A2.)
- ・別刷 (issues) または刷 (impressions) に関連する表示は、その出版物が以前の版と変わっていても版表示として記載することができる。(2B2.)
(コーディングマニュアル 4.2.2H1 ...版の表示があっても、それが単に「刷」を意味するようなものであるならば、その情報は ED フィールドに記録してはならない。)

<PUB>

- ・課題資料では出版者情報がタイトルページに無く、奥付に記載されている(図表 2)。15-16 世紀の刊本では、写本時代の慣習から出版者・印刷者情報が奥付に記載されることが多い。出版などのエリアのどの部分でもそれをタイトルページ以外からとったならば、その情報源を注記エリアで示す。(4A2.)

*NOTE: Publisher statement from colophon

- ・出版者などの名は、完全な正字法形式で、かつ文法的事実(先行する必要な語句とともに)によって転記する。(4C2.)

(AACR2 1.4D2. 出版者名、頒布者名などは...最も簡潔な形で記載する。)

出版者に関連する表示が二つ以上あるときは、一般に、表示されている順序ですべてを記録する。(4C6.)

(コーディングマニュアル 2.2.3F1 出版地、出版者等が複数表示されている場合は、顕著なもの、最初のもの順で、記録する。...2 番目以降は「選択」である。)

*PUB: Apud Hier. Frobenium et Nic. Episcopium (PUB: Frobenius とはしない)

- ・ローマ数字の表記 : M=1000, CIO=1000, D=500, IO=500, C=100, L=50, X=10, V=5

*M D XXX VII=1537

- ・出版地の名の前にある前置詞は転記中に含める。(4B2.)

(AACR2 1.4B4. 土地、個人、団体の名称は、付随している前置詞を省略してそのまま記載する。)

- ・2 つ以上の場所が示されていて、それが同等の重要性をもち、かつその場所がすべて同じ出版者、頒布者または印刷者に関連しているときは、そのすべてを記録する。(4B6.)

(AACR2 1.4C5. 出版者、頒布者などの事務所が 2 箇所以上があり、それらの地名が記述対象に表示されている場合は、最初に出ている地名を常に記載する。...その他のすべての地名は省略する。)

- ・出版地が略語で表示されている場合は、その表示のまま記録して、略語でない形を付記。

Lugd. Batav. = Lugdunum Batauorum = Leiden

*PUB: Lvgd. Batav. [Leiden]

- ・『稀観書の書誌記述』においては、印刷者の名前や場所は、出版者・頒布者のそれと同等の位置付けが与えられている。印刷社の名がタイトルページに表示されているときは、別に出版者表示があるなしに関わらず、記録する。(4C2.)

(AACR2 1.4G1. 出版者名が不明の場合は...製作地および製作者名を記載する。)

- ・出版年または印刷年を日および月を含めて記載する。(4D1.)

<PHYS>

- ・(任意で)挿図の工程や技術を付記する。(5C1.)

*ill. (woodcuts)

- ・1800年以前の出版物については、版型を決定できるときは必ずそれを付記する。(5D1.)

*(4to)=4折版

- ・印刷のない丁またはページ、広告類も数量の表示に含める。広告類を記録した場合は、必ず注記でそれを示す。(5B1.)

(AACR2 2.5B3. なくてもよいもの(広告、白紙ページなど)で番号づけのない部分は無視する。)

*PHYS: 323 [i.e. 319], [9] p.

<VT>

- ・<TR>の記述は、“I/J”、“U/V/W”の転記により資料の表示形と異なるため、VT:TTに転記する前の表示形をそのまま記述し、アクセスポイントを作成する。

<NOTE>

- ・必要があれば折記号の細目を記載した注記を作成する。インキュナブラについては一般に記載する。細目はガスケルの方式(Gaskell, Philip. *A New Introduction to Bibliography*, New York, 1972)に従う。(7C9.)

*NOTE : Signatures: a-r[4] s[6] t-z[4] A-E[4] F[6] G-M[4] N[6] O[4] P[6] Q[4]

- ・挿図のより完全な細目を記載する。(7C10.)

*NOTE: Frobenius device, the caduceus, on t.p. and (larger variant) on last page

- ・ページ付けの誤りを注記。

*NOTE : Errors in paging: no, 301-304 omitted

古版本の書誌作成でも、注意すべき点は一般書と大きく変わりはありません。①情報源から必要な情報を正確に読み取り、②読みとった情報をもとに正しく書誌の同定を行い、③適用する目録規則に基づいて正確に書誌の記述を行う、という基本的な作業が常に重要です。ただ、古版本の場合、この一連の流れがスムーズに進むことを妨げる要素がそこかしこにありますので、こういった点が支障となるかを知っておくことが、目録作成の一助となるでしょう。

BF. 2597

LAZARI

BAYFII ANNOTATIONES IN LEGEM II

De captiuis & postliminio reuersis,
in quibus tractatur De re nauali,
per autorem recognita.

EIVSDEM Annotationes in tractatum
De auro & argento legato,
quibus Vestimētorū & Vasculorū genera explicātur.

*His omnibus imagines ab antiquissimis monumentis
desumptas ad argumenti declarationē subiunximus.*

I T E M

ANTONII THYLESII De coloribus
libellus, à coloribus uestium non alienus.



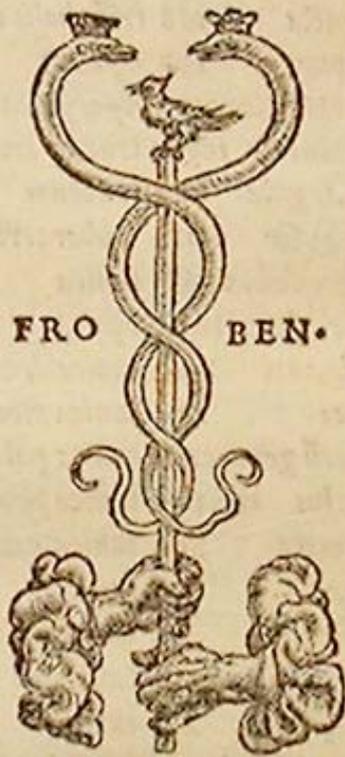
BASILEAE ANNO M D XXXVII

PR

Theod. A. Lehmannus

A. a

图表 1



BASILEAE APVD HIER. FROBENIVM
ET NIC. EPISCOPIVM ANNO
M D XXXVII

Constat rui ii att

フランス啓蒙思想をめぐって

山崎 耕一

(一橋大学社会科学古典資料センター教授)

18世紀のフランスといえば啓蒙思想と考えるのは、ほぼ常識とっていいだろうと思います。高校の世界史などでも、この時代はアンシャン＝レジームと言われ、絶対王政のもとで国王政府とカトリック教会が手を結び、政治と思想信条の両面において個人の自由を抑圧していたとされます。それに対して、啓蒙思想家と呼ばれる一群の人々が現れ、政治・社会・宗教などさまざまな面での不合理を指摘・批判し、社会の改革と個人の自由の実現を呼びかけました。こうして展開された、いわゆる啓蒙思想が人々の共感を得て社会に広まり、やがて1789年になると、啓蒙思想家たちが著作の中で述べた思想を実際の政治や社会において実現すべく、新たに選ばれた若い議員たちが中心になってフランス革命を実行したのです。ですから「啓蒙思想が考えたことをフランス革命が実現した」もしくは「啓蒙思想が原因となってフランス革命が導かれた」と言えるのだというわけです。

もちろん、こうした見方はある意味では正しいものです。ヴォルテール、モンテスキュー、ディドロ、ルソー、エルヴェシウス、ドルバック、といった一群の思想家たちは確かに実在しましたし、それぞれに影響のある著作を発表しました。これらの著作は思想研究の面からも、また文学研究の面からも重要なものであって、こうした分野の学部・学科を持つ大学の図書館であれば、これらの著作をある程度は揃えているだろうと思います。今回の講義でも、まずこれらの思想家それぞれがどのような人たちで、どのような傾向もしくは特色を持っていたのかを重点的に紹介したいと思います。

しかし最近の思想史研究では、上に述べたような「啓蒙思想」の位置付けに疑問を呈する見方が現れるようになりました。フランスのロジェ・シャルチエやアメリカのロバート・ダーントン、キース・マイケル・ベイカーといった歴史家たちの見解です。これらも講義の中で紹介したいと思いますが、彼らの疑問は、簡単に要約してしまうならば、二つの問題に集約できます。ひとつは「啓蒙思想とはまとまった一つの思想運動だったのだろうか」という疑問であり、もうひとつは「啓蒙思想はストレートにフランス革命につながったのだろうか」という疑問です。第一の疑問について説明しますと、例えばルフラン・ド・ポンピニャンという詩人はいわゆる啓蒙思想家たちを批判したので、ヴォルテールから辛辣な批判を浴びました。この詩人は通常「反啓蒙思想派」ないしは「保守反動」と位置付けられています。しかし「啓蒙思想家」とされる J.-J.ルソーもヴォルテールを批判し、ディドロとは喧嘩別れしました。ルソーとルフラン・ド・ポンピニャンはどこが違うのでしょうか。また「啓蒙思想家」は個人がそれぞれに持つ理性と自由を重視したとされますが、それでは啓蒙思想に批判的だった人々は理性や自由を重視しなかったのでしょうか。こうした点を調べてみると、「啓蒙思想家」とされる人々がすべて同じ特徴を持っているわけでもなければ、「反啓蒙思想家」とははっきり異なっていたというわけでもないことが明らかになるのです。そうしますと、改めて「啓蒙思想とはそもそも何だったのか」を問わなければなりません。講義では啓蒙思想家と

論争をした J.-N.モローを紹介したいと思います。

第二の疑問について説明しますと、上に述べたダントンは、革命家たちは啓蒙思想家に敵対的だったとしています。本稿の上に述べたヴォルテールなどは、ダントンによれば啓蒙思想の第一世代であり、彼らは確かに既成秩序に批判的でした。しかしそれより二回りほど若いシュアールやモルレなどの第二世代になると、アカデミー・フランセーズの会員に選ばれたり、国王から年金をもらったりして、彼ら自身が既成秩序の中に入っていきます。革命を起こしたのは彼らよりさらに若い世代であって、革命家は既成秩序に安住するようになった第二世代の啓蒙思想家を打倒そうと努めたのでした。「(第二世代の) 啓蒙思想家に敵対的だった」ことを「啓蒙思想に敵対的だった」とみなして構わないかどうかは疑問だと思いますが、少なくとも啓蒙思想とフランス革命の関係が従来考えられていたほどすっきりとストレートなものでないことは明らかでしょう。また啓蒙思想を考える際には、ここで述べた第二世代、さらには(革命を行なった) 第三世代に属する二流・三流の、現在では忘れられてしまった思想家たちにも目を配らなければならないことも明らかだと思います。大学図書館での集書においても、その辺りを意識していただければと思いますので、時間の許す限り、ここに述べた人々についても具体的に紹介したいと思います。

カメラリストたちの著作とその楽しみ

川又 祐

(日本大学法学部教授)

- 1 はじめに
- 2 カメラリストの口絵と表題頁
- 3 ゼッケンドルフの『ドイツ君主国』 *Teutscher Fürsten-Stat*
- 4 おわりに

1 はじめに

官房学 (Kameralwissenschaft, Cameralism) は、16 世紀から 19 世紀初頭までヨーロッパ (主としてドイツ・オーストリア) を支配した学問である。当初は、法学、政治学、行政学、経済学、財政学、統計学、教育学、農・林・漁・工・鉱業学などを包含する総合学問の観を呈していた。それが、1727 年、ハレ大学とフランクフルト・アン・デア・オーダー大学とに官房学の講座が設けられるようになって、ポリツァイ学、経済学 (商業学)、狭義の官房学 (財政学) の 3 つからなる広義の官房学として整理されることになる。この 1727 年が官房学を前後期に分かつことになる。

前期官房学の代表者には、M.v.オッセ (1506-1557)、K.クロック (1583-1655)、V.L.v.ゼッケンドルフ (1626-1692)、J.J.ベッヒャー (1635-82)、W.v.シュレーダー (1640-88)、Ph.W.v.ヘルニック (1640-1714) が、そして後期官房学の代表者には、ハレ大学官房学教授 S.P.ガッサー (1676-1745)、フランクフルト・アン・デア・オーダー大学官房学教授 J.Ch.ディトマール (1678?-1737)、ウィーンから後にゲッティンゲン大学官房学教授となった J.H.G.v.ユスティ (1717-1771)、ウィーン大学官房学教授 J.v.ゾネンフェルス (1732-1817) らがいる。

前期カメラリストたちは、行政官僚 (顧問官) を務めるかたわら、政策提言の書である君主鑑の執筆者でもあった。後期になると、官房学を学んだ者だけが官吏に登用されるようになったことから、官吏養成の学として性格づけられるようになる。カメラリストは、行政官僚や執筆者という役割に、大学教員としての役割が追加された。

2 カメラリストの口絵と表題頁

カメラリストの執筆した文献数は膨大であり、これをすべて渉猟することは困難である。しかしながら、当時の流行でもあったのか、彼らは、本文を展開するまでに、口絵、肖像画、表題、表題頁 (扉絵)、囲み飾り、プリンターズマーク (デヴァイス)、モットー、エンブレム、他者からの引用文、で自著を飾った。彼らは、本文を含むあらゆるものを動員して、自己の主張を総合的に表現していった。しかしながら、カメラリスト全員が自著を口絵やエンブレムで飾ったわけではもちろんない。統計を取っ

たわけではないので、正確性には欠けるが、カメラリストであったボルニッツがエンブレム集を出版しているほどであるので、その流行には疑念がないのである。

通常、図書館の目録（書誌）には、著者、表題、出版年、出版社・者、頁数などは収録されるが、口絵、肖像画、モットー、エンブレムなどの記述は、目にすることはほとんどない。だが、私たち研究者からしてみると、これらには、原著者の主張が最も簡潔にかつ視覚的に表現されている場合が多いのである。

口絵でもっとも有名なものの一つにホップズの『リヴァイアサン』（1651）がある。ホップズに劣らずにカメラリストは、前後期を通じて、自著を口絵などで飾っている。ここでは、前後期を通じて、カメラリストの文献に登場する口絵を紹介する。

3 ゼッケンドルフの『ドイツ君主国』 *Teutscher Fürsten-Stat*

ゼッケンドルフは、カメラリストを代表する人物の 1 人であり、その主著『ドイツ君主国』も官房学を代表する著作の 1 つである。この『ドイツ君主国』初版には、ゼッケンドルフの主張を画像化した口絵、表題頁に描かれたエンブレムとモットーという、17 世紀に流行した出版の典型を見ることができる。本書はこれまで、M.フムパートやその他の研究者が述べるがごとく、1656 年から 1754 年まで、計 8 版を重ね、刊行は 12 回を数えたといわれている。しかし版数の特定には疑問があり、刊行回数そのものに間違いがある。先入観や勘違いから『ドイツ君主国』の書誌情報だけが独り歩きしている。

(1)1656 年初版

初版には、印刷者・印刷地と出版者・出版地がそれぞれ記載されている。どちらを採録するか混乱があり、書誌が統一されていない。また、口絵と表題頁にはエンブレムが描かれているが、書誌情報に記載されない場合もある。また、初版には表題表記（*Teutscher Fürsten Stat* と *Teutscher Fürsten-Stat*）や頁数表記の違いから異本があることが分かる。こうした異本の存在もまた、あまり知られていない。

(2)版数

著者ゼッケンドルフが 1692 年に歿するまで、『ドイツ君主国』はその存命中、6 回刊行されている。第 2 版は、著者の了解を得ずに刊行されており、ゼッケンドルフは自らの意思で第 3 版を刊行する。刊行年が異なるにもかかわらず、第 5 版は 2 種類存在する。今となつては、この出版の経緯は明らかではないが、ここから、版数の表記が怪しくなる。ビーヒリンクが「最新版」と銘打って 3 回刊行するが、これらの後半 2 つを、研究者が第 7 版、第 8 版とするに至って、混乱は最高潮に達する。

4 おわりに

制約の多い中で『ドイツ君主国』の各版を照合することは困難がつきまとう。しかしながら、それを果たさずには、版の確定はできない。著者が歿した後に、ある編者

が当該著作を刊行した場合、旧版からの連番で版数を数えることが妥当なことなのか、検討を要する。アダム・スミスの『国富論』はその生存中、1776年の初版から、1789年の第5版までを数えるが、デュガルド・スチュアート、J.R.マカロック、エドウィン・キャンナン、そして W.B.トッドなどなどが『国富論』をスミスの歿後に刊行しても、それを初版から数えて何版に該当するか議論することはしないからである。ビーヒリンク版を連番で数えてしまったために、要らぬ混乱が生じたのである。

カメラリストの著作は、口絵やモットーで飾られているので、それらを総合的に見ていくことが必要である。その意味でも書誌情報が果たす役割は、非常に大きい。

印刷術出現前夜のイタリアの書物

大黒 俊二

(大阪市立大学大学院文学研究科教授)

「社会科学古典資料講習会」で「印刷術出現前夜のイタリアの書物」というタイトルでお話させていただくことになりました。さてそれでは「社会科学古典資料」と「印刷術出現前夜のイタリアの書物」はどう関係するのでしょうか。一つの例を見ることから始めたいと思います。これはアダム・スミス『諸国民の富』初版本（1776年）のタイトルページ（図版参照）で、この書はいうまでもなく社会科学の古典であります。しかしここで注目したいのはこの本の中身ではなくこのタイトルページそのものです。私たちはこれを見ると、これが表紙の次にくるタイトルページであり、また著者がアダム・スミスで書名が『諸国民の富』であるとすぐわかります。ということは本書は私たちが日常「書物」として慣れ親しんでいるものにすんなりはまるということです。今日私がお話したいことは、「書物」も「古典」もこのような形を取るまでには長い発展の歴史があったということ、そしてその歴史において「印刷術出現前夜のイタリア」が果たした役割であります。

今日の私たちはこの図版を見てすぐ書物のタイトルページとわかります。しかし、たとえば千年前の本だところしたタイトルページそのものがなく、タイトルページで書物を認識することが不可能であります。さらに1500年前になると文字はすべて切れ目なく続けて書かれていて、大変読みにくいものです。ANINQUIRYINTOTHENATURANDCAUSESOFTHEWEALHTHOFNATIONSを読む苦勞を想像してみてください。さらに2000年前になると書物はこうした冊子本ではなく巻物（卷子本）でした。書物は誕生し、成長し、有為転変を経たのちようやく私たちが今知っているような形になりました。そうした発展の節目のうち、今日は私の専門といたします中世末期のイタリア、印刷術出現前夜の時代が果たした役割を3つの論点に分けてお話ししたいと思います。

第一は文字の形すなわち書体です。もう一度『諸国民の富』のタイトルページを見てみましょう。私たちはこのページを読むことができます。ということはアルファベットを識別し単語の意味を解することができるということであり、I、N、Q、Uなどの字、アルファベットの大文字を理解できるということでもあります。あたりまえのようですが、これが時代をさかのぼるとあたりまえではなくなってきました。アルファベットの形も大きな歴史的変容を経てきたものであり、過去のアルファベットのなかには、これがアルファベットかと驚くような異様な形をしたものがいくつもあります。しかしそうした書体の変化や振幅はほぼ15世紀頃に落ち着き、その形が印刷術に採用されます。その書体がローマン体と呼ばれているもので、『諸国民の富』タイトルページもこのローマン体がいわれています。印刷術はその大量生産と規格化で書体の揺れを防ぎ固定化しました。そのおかげで15世紀以後の印刷本であれ

ば、私たちはそのアルファベットを完全に理解することができます。今日、パソコンには何十ものフォントが入っていますが、それらは基本としてのローマン体をデザイン的に変形したものにすぎません。印刷本のアルファベットの形を今あるような形に固定化したこと、これが「印刷術出現前夜のイタリア」が果たした第一の役割であります。講義で第一に取り上げたいのは、アルファベットが古代から中世にかけて変化し、最終的にローマン体という書体にたどり着くまでの経緯と、この書体が印刷術によって受け継がれていく様相であります。

第二は、古典が書物として身に着ける衣装、すなわち製本や装丁であります。『諸国民の富』初版本、さらにその後の校訂本もみな立派なハードカバーの書物です。一般に古典と呼ばれている作品はこのように書物として立派で堂々とした格好をしています。アリストテレス全集、トマス・アクィナス全集、ヘーゲル全集みなしかりです。こうした古典書籍は、あたかもその外観の重々しさが中身の重要性を暗示しているかのようであり、いやむしろ、中身が重要だからそれにふさわしい衣を着せられているというべきでしょう。古典書籍はその外観で、大事に扱え、読み捨ててはならぬと告げているようです。しかし書物のなかには、週刊誌や漫画本のように粗悪な紙に印刷され、仮綴され、ぺらぺらの表紙をつけた書物、短い生命しかもたず読み捨てられることを前提に作られている本があるのも事実です。古典と非古典の違いがモノとしての書物の形態にはっきり表わされるという現象、これも私たちがよく知っている現代の現象ですが、この現象は印刷術出現前夜のイタリアで明瞭な姿を現します。印刷術出現前夜、まだ書物が手書きであった時代にすでにこのような違いは現れており、印刷術はこの違いをさらに増幅させることになりました。15世紀のイタリアでは、ある研究者が「マクロ流通本」と「ミクロ流通本」と呼ぶ二系列の書物が生産され、読まれていました。「マクロ流通本」と「ミクロ流通本」の違いは外見ですぐわかります。「マクロ流通本」はプロの写字生、挿絵画家、装丁家を動員して作った豪華本であり、全欧で流通しました。これに対し「ミクロ流通本」は素人が自分で筆写し、装丁も手作りの粗末な書物であり、読まれる範囲も作成者とせいぜいその友人知己の間に限られています。書物の内容からいえば「マクロ流通本」が古典に、「ミクロ流通本」が非古典に対応することはおわかりでしょう。古典にはそれにふさわしい衣を着せるべきだという考え方は、古典はそれにふさわしい書体で書くべきだという考え方とともに、15世紀のイタリアで一般化したものです。論点の第二番目として、「マクロ流通本」と「ミクロ流通本」という視点を手がかりに、古典の意味をそれがまとう衣装という点から考えてみたいと思います。

第三番目に注目したいのは、著者と作品と書物の一致という点です。もう一度『諸国民の富』のタイトルページを見てみましょう。ここには著者はアダム・スミスという人物であり、以下には彼の書いた『諸国民の富』という作品が含まれていると明記されています。モノとしての一冊の本に、一人の著者による、一つの一貫したテキストが含まれている、というのが著者と作品と書物の一致ということであり、私たちはこれを当然のように思っています。図書館や本屋に行って書棚を見ることを想像してみてください。現在の私たちは背表紙で著者とタイトルを確認してから本を手に取ります。しかし印刷術が出現するまでの中世の本ではこのようなことは不可能でした。中世の写本には表紙にも背表紙にも著者やタイトルはな

く、表紙をめくってもタイトルページなどなく、いきなり本文が始まるのです。ヨーロッパに行くと初めて中世の写本にふれたとき、私が驚いたのはこの点でした。どこの図書館に行っても中世の写本は、著者や表題ではなく記号や数字で表記されており、これで閲覧を請求するのです。なぜタイトルページがないのか、なぜ表紙に著者や表題を書かないのかといえれば、それは書きようがないからです。中世の写本はたいてい複数の著者の複数の作品を含んでおり、しかも一つの作品全体ではなくその一部のみを収めていることが少なくありません。こうしたごたませのテキストが書物としては一冊の形をしているのです。こうなるのは書物の所有者が、自分の必要にあわせて筆写したさまざまなテキストをある時点でまとめて合冊したためです。現在の身近な例でいえば、中世の写本はルーズリーフを綴じたものに似ているといえるでしょう。こうしたごたませ本を『諸国民の富』のような著者＝作品＝書物に変化させたのが、ほかならぬ印刷術でした。大量生産する印刷術では、読者一人ひとりの必要に応じて多様なテキストを含む書物を作ることは不可能で、モノとしての書物も規格化せざるをえません。中世の写本はオーダーメイドであり、印刷本はレディメイドであります。書物の規格化とレディメイド化が著者＝作品＝書物の三一致を推進し、その結果として古典書籍もモノとして物理的に独立してくるのです。講義で三番目に取り上げたいのは、中世から近代へ、写本から印刷本への過程で生じたこの三一致と古典との関係です。

このように「印刷術出現前夜のイタリア」は、今の書物、今の古典という姿が出来上がる上で重要な貢献をなしました。今回このテーマを取り上げたのもそのためですが、最後にもう一点付け加えておきたいことがあります。それは現代という時代は、ローマン体で印刷され、ハードカバーで装丁され、著者＝作品＝書物の三一致を体現する書物、という観念が揺らぎつつある時代だということです。IT化の進行によって今や作品は、本棚ではなくハードディスク上にあり、それを背表紙ではなくファイル名で認識し、インクではなく液晶の色で読み、しかもコピー・アンド・ペーストで自由に切り貼りできるようになっています。携帯小説のように著者は不特定多数という小説まで現れています。ハードカバーの書物の時代は終わりつつある、少なくともその一角は確実に崩れたという印象を私たちはもっています。そのことがかえって「書物」の黄金時代、印刷術出現以後 20 世紀までの時代を一つの歴史時代として浮かび上がらせているように思います。書物の時代が終わってあらためて書物の意味に気づく、いわば「ミネルヴァの梟」が飛び立つ時点に今私たちはいます。講義の最後ではこの点にふれたいと思います。